

書評漫才実践

—学校・図書館をつなげる—

○村上仁志（大阪市立みどり小学校）

はじめに

小学校学習指導要領解説国語編第3章第2節第3学年及び第4学年の「C読むこと」において、「幅広く読書しようとする態度を育てる」観点から、ブックトークなどの本の紹介活動が指導事項に取り上げられている。このため近年、小学校教育の中でブックトークの他にビブリオバトル（書評合戦）という紹介活動のバリエーションが増えている。しかし、ビブリオバトル形式を取り入れた読書活動では、読書に対するポジティブ感は増加するものの、読書量の増加が見られない結果となっている（高木・松岡・熊田・住本・筒井, 2012）。これは、ビブリオバトルの参加者の属性が本好きであるという面に起因していると考えられる。ビブリオバトルの発表者は、紹介する本の著者の考えおよび背景を十分に読み込んでおり、本が好きな聴衆の前で本の紹介が行われることが多い。

小学生段階では、並行読書を通して同一の著書を読み込む最初の時期になる。このことから、小学生の発達段階に合った興味を抱かせる本の紹介活動の工夫が求められる。

国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター（2013）の報告から、成人がどれだけ読書を好きだと感じているのかは、就学前から中学時代までの読書量が関係していることを示唆している。このことから、生涯にわたる読書活動を支えるためにも、小学生の頃から本に親しむ活動を学校教育の中で取り組む必要がある。

本実践では、本の紹介活動として書評漫才を取り入れることとした。書評漫才とは、本の紹介（書評）と漫才を合体させた造語で、2人以上の漫才ユニットで1冊の本を紹介する活動である。書評漫才の成り立ちは、大阪市立中央図書館で子供達に行われたアンケートで圧倒的1位の行事希望となった「お笑いに本の紹介を加えること」で、図書館の来館者数の増加と読書に関心をもってもらうことを狙った大阪発祥の本の紹介活動である。子供達のニーズとしてのお笑いと言評（本の紹介）の融合である書評漫才は、子供達目線で自身が行う本の紹介活動であり、本に対する親しみを持たせる本の紹介活動として実践の価値がある。

しかし、書評漫才はこれまで学校での導入事例がなかった。このために、書評漫才に取り組みたいと思った子供達が参加するには、1. 仲間を誘ってコンビをつくる、2. 漫才という表現手段を身につける、3. 台本の作り方を学ぶという壁が立ちただかる。さらに発表の場は、大阪市立中央図書館の書評漫才グランプリに限られているという状況であった。

書評漫才を学校教育で実践する意義は、第1に本の紹介活動のバリエーションを増やすことができるという点、第2に書評漫才の壁となる活動が子供の表現手段を身につける教育活動そのものであるという点が挙げられる。大阪市では、近年は全校発表の作品展が中心となり、劇発表会のような言語

による表現活動は実施されにくくなっている。漫才のやりとりは、ボケとツッコミという2役による演劇の一種である。全体で1つの劇を演じる場合にはセリフの多寡に偏りがでるが、漫才の場合は学校演劇と比べて発話頻度が高く、コミュニケーション上の間の取り方や非言語表現（身ぶり）も多く求められる。つまり、ひとつの学級もしくは学年で演劇を1つに取り組むよりも、個別の表現活動の量がけた違いに多くなる。また、表現手段として漫才を身につけることは、地域大阪の伝統を受け継ぐ上方漫才の息吹を感じ取る機会にもなる。これは、大阪市教育振興基本計画にある、「郷土『大阪』を愛する子」を育成するための直接的な教育活動につながる。このことから、漫才の表現活動を教育活動の中に取り入れる授業の開発と実践の意義は大きい。学校の教育活動として書評漫才を取り入れる本実践の価値は以下の3点となる。

1. 学級集団の中でコンビを作り、仲間で助けあって1つの課題をこなす力を育成する。
2. 表現手段としての漫才を身につける。
3. 書評漫才の教育効果を子供・保護者・教員の反応から検討する。

書評漫才を行うためには、紹介したい本のあらすじを必ず理解しておく必要がある。次に、コンビという2者で演じるため、漫才で取り上げる部分を決め、どうボケてツッコミを言語化する必要がある。本の紹介活動として、ビブリオバトルが1人で本の内容を紹介することに対して、書評漫才では2人以上で伝える点が異なる。

書評漫才では、2人の演じ手同士で1冊の本の話題のやりとりを行う。漫才を行うには、2人の意見のすり合わせが重要である。また、漫才におけるやりとりは2人であるがゆえに、語用論における相補性が練習中および演技中に見て取れる。この場合の語用論とは、若月・生田・吉田（2006）によるところのワツラウィックのコミュニケーションの語用論であり、第五公理である「全てのコミュニケーションは『相称的(Symmetrical)』または『相補的(Complementary)』のどちらかである」を指す。

漫才のもつ相補的とは、「間違っことを意図的に伝える」ボケ役と、「間違っことを正す」ツッコミ役がいるおかげでコミュニケーションが成り立っている関係性を指す。1つのテーマの話を漫才を用いて進める上で、2人のやりとりによってお互いに補い合って会話をすすめているのである。相称的部分は、「なるほど」と相槌をうつことで会話がさらに盛り上がりていくようなコミュニケーションに見られる。

漫才を用いて本を紹介することは、「話のずれ」「意外性」といった言葉を楽しむ活動となる。このため、本の読み込みが必要となってくる。

聞き手にとって漫才は、どのように映るのだろうか。漫才の

ボケ（ずれ）については、一方的に話を聞くのではなく、アニメーションにおけるダウト読みに見られる効果が見込める。この読み方は、読書への意識づけや読書への導入につながる。漫才のやりとりにおいて、間違っただけで伝えている（ダウト読みである）ことに気がつく（ボケに気づく）ことで、しっかり聞き取ろうとする頭に切り替わるだろう。また、間違いを直す働きのあるツッコミによって、「共感的」に聞くことができる。これらの一連の流れによって、聞き手は書評漫才を通して書評（本の説明）への興味や理解が深まる。また、一度読んだ本が書評漫才で紹介されることで、本に対する印象が変わる可能性を秘めている。

本実践は、2014年に4年生を対象として総合的な学習の時間にて行った書評漫才の実践である。

本実践の目的は、1. 学校教育の中で書評漫才の授業実践を行うためのプログラムを開発することと、2. その教育効果を検討することにあった。

実践 【日常の】読書活動の中での紹介活動

読書活動の記録を積み上げ、書評漫才につなげていくために、図書の時間を活用して読んだ本について読書紹介カードを書かせた(資料1)。絵や文で表現し、他者に本を紹介するツールとする効果に加え、書評漫才の題材を取り上げるときに本の概要を相方に紹介するための資料として活用された。

(資料1 本の紹介カード)



大阪市立中央図書館における書評漫才講座（1時間）

大阪市立中央図書館に書評漫才の出前授業を依頼した。笑いを含めて本の魅力を楽しく紹介することで、子供のもっと知りたい手に取ってみたいという気持ちを刺激することを目的とした。講座内容は、みんなにすすめたい本のおもしろいポイントや話を漫才風にして紹介していくことと漫才作りに役立つ本を用いる参考図書の紹介が行われた。また、過去の書評漫才グランプリの動画を視聴して、書評漫才のイメージを膨らませた（資料2）。

(資料2 書評漫才講座)



総合的な学習の時間で書評漫才を行う（11時間）

11時間の総合的な学習の時間を行い、漫才というコミュニケーションツールを用いて、国語科の本の紹介活動を行った。

書評漫才の指導計画

計画		11時間
単元名	目標	合計11時間
A.漫才コンビを結成しよう。漫才師のネタをみよう	漫才に対する関心を高める。ボケ・ツッコミのタイミング・ネタふりの流れを理解する。	1時間
B.1日1ネタ漫才をしよう	短いボケ・ツッコミについて考え、表現することができる。	2時間
C.台本の構成を考えよう	漫才におけるネタの書き方・作り方を自分の好きな漫才師のネタから取り上げ、フリ・オチ・フォローの話を順番を組み立てることができる。	1時間
D.取り上げる本と伝える相手を考えよう	伝える相手を意識して本を選ぶことができる。	1時間
E.自分のネタを作ろう	気に入った場面をもとに文章化したり、自分なりのネタをフリ・オチ・フォローの組み立てを中心として台本を作成したりする。	2時間
F.書評漫才の練習をしよう	作成した台本をもとに、伝える声の大きさ・速さ・抑揚・間の取り方に気をつけて、コンビで練習をする。演じる中での誤動作より伝わりやすい台本に構成する。	2時間
G.先生の前でネタを披露しよう	声の大きさ・間のとり方・速さに気をつけてネタを披露する。	1時間
H.漫才を発表しよう	お楽しみ会で漫才のネタを披露し、お互いの良いところを評価する。	1時間

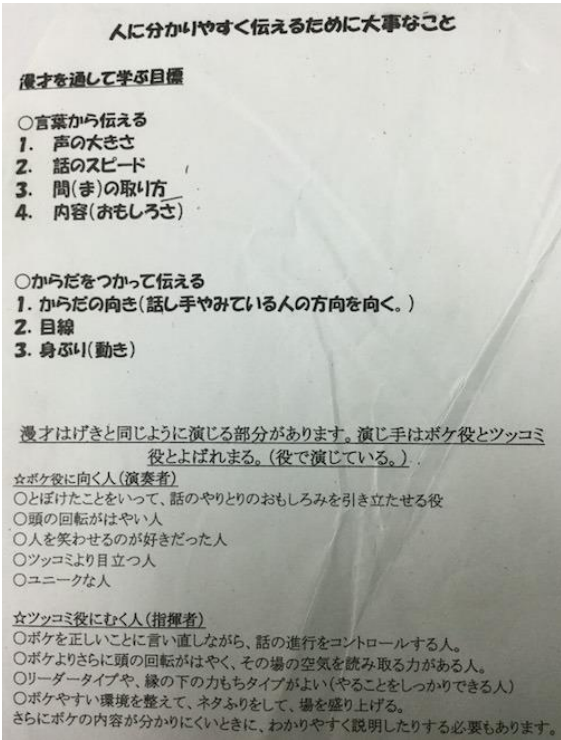
書評漫才の指導過程と指導時の反応

A. 漫才コンビを結成しよう、漫才師のネタをみよう

座席が隣同士の子供達でコンビを組むこととした。学級集団の中で誰といつペアになっても、共に課題に取り組む指導を行うことで、本実践での価値である「学級集団の中でコンビを作り、仲間で助けあって1つの課題をこなす力を育成する」ことも達成できる。

漫才師のネタを視聴しコンビで好みのネタを決めさせた。なぜそのコンビ（ネタ）が好きなのかを考えさせ、自分たちの好みの漫才を浮き彫りにした。人にわかりやすく伝えるために大事なことから、「お笑いの達人になろう！2—コミュニケーション力up 漫才」（ポプラ社）を参考に漫才のポイントを指導した(資料3)。

(資料3 漫才のポイント)



B. 1日1ネタ漫才をしよう

漫才の作り方についてボケ方とツッコミ方の例を取り上げ、指導を行った(資料4)。

(資料4 ポケとツッコミ練習ドリル)

漫才を考えよう 3
1日1ネタ
年組 番 名前()

おだい(バレーボール)
ポケ「レシーブ、トス、ロ」
ツッコミ「ロ」
例
ポケ「レシーブ、トス、スパイス」
ツッコミ「おいおい。味つけてどうすんだよ！」

みぶりと間のおき方に気をつけよう。短くてわかりやすいことばをいれます。

練習1
ポケ「レシーブ、トス、_____」
ツッコミ「_____」

練習2
ポケ「レシーブ、トス、_____」
ツッコミ「_____」

本番
ポケ「レシーブ、トス、_____」
言い方で気をつけること()
間のとりかた()
みぶり()
ツッコミ「_____」

言い方で気をつけること()
間のとりかた()
みぶり()

引用 お笑いの達人になろう ポプラ社 監修 松竹芸能より

次に、漫画「ワンピース」のお話のコマを選び、会話部分を空けてフリ・オチ・フォローの文章を完成させるワークを行った(練習用のワークに限る使用許諾のため、本論文の掲載不可)。

C. 台本の構成を考えよう

家庭でのテレビ番組・YOUTUBE・M1 グランプリ DVD の視聴で、自分の好きな漫才師のネタを取り上げさせ、好きな漫才師のネタをもとに、フリ・オチ・フォローの話の順番を文章で再現させた。子供達は文章化を行う中で、取り上げられた場面・間違った説明をするポケと正すツッコミの部分はどこに作るかによって、話の盛り上がりや本の読み方の視点が変わること気がついた。

D. 取り上げる本と伝える相手を考えよう

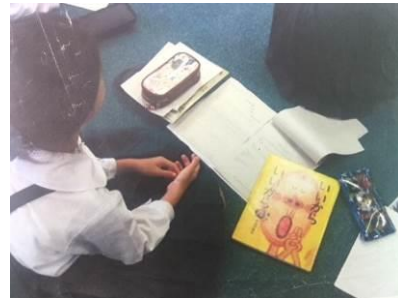
隣同士の子供達が、本の紹介カードおよび図書室で自分の好きな本を選んだ(資料5)。コンビニで話し合いをしながら、1冊の本を読む姿も見られた。「この本ならここがひきつけることができる」など紹介の観点を明らかにしながら読むように指導した。漫才で伝える相手を意識させ、「誰にでもわかる」という観点では、絵本で読んだり読み聞かせで聞いたりしているであろう本が選ばれた。例えば、桃太郎で書評漫才を行う場合は、多くの子供が知っていることでポケることになる。引き連れる動物が犬ではなく猫としてポケた場合には、低学年の子供からの「違うよ」というツッコミは強くおきる。一方、このネタは高学年では興味を持たれない。桃太郎が鬼からみると迷惑な人という視点で書評漫才を作成し、話の視点を変えて読み直す機会につなげようとする試みも見られた。

どの年齢対象であっても、前フリ(説明)を意識して本の内容・作者を何も知らない人でも分かるように説明することに留意し、話をずらすことで笑わせるにはどうすればよいか

という課題を意識した本選びを繰り返した。

どの年齢対象でも禁止となったのは、下ネタ、人を傷つける言葉や身ぶりであった。

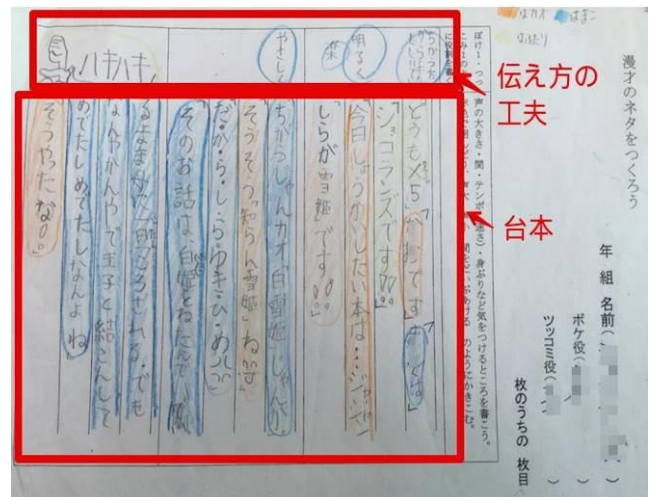
(資料5 紹介したい本の選択)



E. 自分のネタを作ろう

本を読み込んで気に入った場面をもとに文章化し、自分たちなりのネタの台本をフリ・オチ・フォローの組み立てを中心として作成した(資料6)。「もし、このお話の設定(文脈)が〜なら」など想像を働かせながら、本を読み文脈から台本を考えていった。

(資料6 書評漫才台本)



書評漫才例として、絵本「ぐりとぐらのおおそうじ」を取り上げる。低学年対象とした書評漫才として作成された。前半は、ダウト読みに似た内容、中盤は、出て来たものと違うものによるポケ、後半のオチの部分は、本の入手先を紹介した書評漫才台本が作成された。以下が台本の一部である。前半(ダウト読み)

ポケ	今回紹介する本は「ぐりとぐらのおおそうじ」です。
ツッコミ	「ぐりとぐら」やろ。(ダウト読み)
ポケ	まあ、そんなこと気にしない、気にしない。

中盤(出て来たものでポケ続けるダウト読み)

ポケ	サンタクロースの袋がでてきたよ(本編は大きい袋とだけ出てくる)。トナカイも入っていたよ。
ツッコミ	なんで? トナカイが?
ポケ	トナカイは冬以外、サンタクロースの袋にすんでるねん。
ポケ	窮屈なところ好きなん? なんでやねん。

後半（オチ）

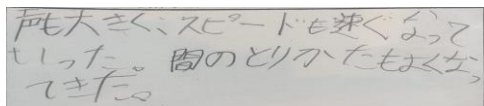
ツッコミ	ところで、この本どこで読めるの？
ボケ	学校の図書室の絵本の「くの棚」と、ブラックホールを中心部で売ってるよ。（本の場所とボケを加えている。）
ツッコミ	そんなところで買えるか。買えたとしても、一生帰ってこれないよ。ブラックホールを中心部に、本屋あるん？もうええわ！
ボケとツッコミ	どうもありがとうございました。

F. 書評漫才の練習をしよう

声の大きさ・間のとり方・速さ・抑揚に気をつけて、各コンビで練習を重ねた。

恥ずかしさを感じる子供には、運動場の端から校舎まで届く声を出す練習を休み時間に重ねた。コンビニで声を出すことで恥ずかしさは柔らぎ、大きな声が出るようになった。この練習は、友達に見てもらうことで、声が小さいといくら面白くても「笑い」という反応につながらないことに気付かせる意図があった。ただし、練習は任意とした。運動場の端まで届く声をイメージして練習するよう声かけをした（資料7）。

（資料7 運動場での練習ふり返り）



漫才における話の伝わり加減は「笑い」という反応によってフィードバックされた。このためどこが「笑い」になって伝わるのか、どうして「笑い」につながったのかについて子供達が考えさせることで、伝え方の改善につながった。

G. 先生の前でネタを披露しよう

教員の前でネタを披露した。披露後に、声の大きさ・間のとり方・速さ・抑揚・内容について、評価シートでフィードバックを行った（資料8）。これにより、伝えかたの表現を工夫する児童も見られた。また iPad で動画を撮影し、この動画と共にフィードバックを見ることにより、自身の課題についての確に取り組むことができた。

（資料8 評価シート）

漫才審査委員になろう			
年 組 番 名前()			
ボケ役 ツッコミ役 ネタを考えた人		さん さん さん	
◎、○、△のどれかを付	ボケ ◎、○、△	◎、○、△のどれかを付ける	ツッコミ ◎、○、△
声の大きさ		声の大きさ	
間のとり方		間のとり方	
身ぶり(動き)		身ぶり(動き)	
話のスピード		話のスピード	
体の向き (前を向いているか)		体の向き (前を向いているか)	
内容(面白さ)		内容(面白さ)	

H. 書評才を発表しよう

学習参観で、持ち時間1～2分の書評漫才を学級の子供達と保護者に対して発表した。

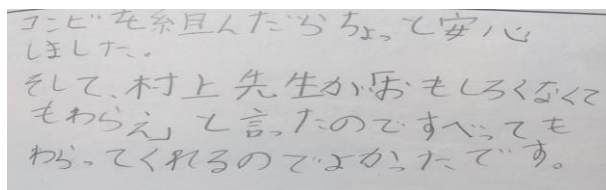
〈聞く側の指導〉

子供達に対して以下の聞き方の教示（指導）を行った。

漫才は、話し手と聞き手が作り上げる、みんなで作る活動です。漫才で「笑う」ことは、「話がわかっているよ」という「うなずき」と同じことです。「聞いているよ」というサインです。この聞き手が笑ってくれるという反応があることで、漫才の面白さが続き、最後まで漫才をしようという気持ちにつながります。漫才では、話のはじめのフリの部分をしっかり聞いていないと、伏線（ゆうすげ村の小さな旅館で指導済み）の回収ができなくなるよ。「ちょっとでも面白いと思えば笑おう」「あまり面白くなくても笑おう」、「面白くなければ、面白い点を見つけ出して笑おう」

そして、うまくいかなくても、あたたかい雰囲気の中で行うことが大切であることを指導した（資料9）。

（資料9 あたたかい雰囲気の中で演じることができた実感）



書評漫才発表の後に、評価シート（資料8）を漫才審査員になろうシートとして活用した。友達の発表で聞き手の子供が、声の大きさ・間のとり方・速さ・抑揚・内容について、評価して一言添えて演じ手に渡した。

〈演じる側の指導〉

笑いが起きなくて（滑って）も、「おいしい」という感覚もあるという漫才の考え方を伝えた。うまくいかなかった経験に基づき、「面白く伝えるには」という自己との対話とボケ役とツッコミ役で話していくことが必要であることを伝えた。「ウケない体験」は、学級経営における鉄則である、間違えても「しめた」と思うべきであるということと同じ感覚であることを指導した。

家庭で保護者の方と子供達で「どうすれば伝わるか」についての家庭でのやりとりがさらに活発になった。親子間で本についての話題が増加した。

書評漫才実践後に、「間違えてもおいしい」「セリフを忘れてもおいしい」という感覚を身につけた子供がいた反面、やはり「はずすと恥ずかしい」という感覚をもつ児童もたくさんいた。しかし、「面白くなくても面白さを見出して笑う」指導が功を奏して、笑いとして外しても温かい雰囲気の中で書評漫才は演じられた（資料10）。

（資料10 書評漫才発表の様子）



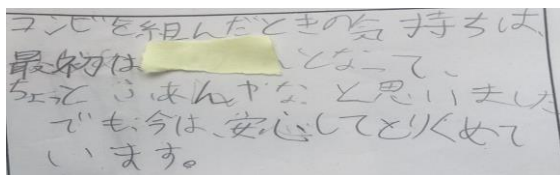
指導実践の成果と課題

本実践の価値として仮説を立てた以下の3点から、成果と課題が明らかになった。

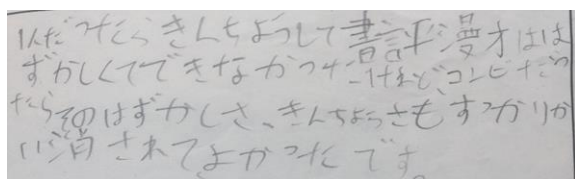
1. 学級集団の中でコンビを作り、仲間で助けあって1つの課題をこなす力を育成する。

漫才のセリフを忘れてしまった子供がいても、相方の子供が続きを教えたり笑い飛ばしたりすることで、演じることが難しい子供達でも取り組むことができた。このような場合でも、聞き手の子供達は自分たちも演じる立場であるため、「セリフを忘れた気持ちがわかるから待てるわぁ」と困った立場になったときのことを考えると共感できるという声もあがった。コンビを組み練習を重ねることで、相方を信頼し緊張感や恥ずかしさが柔らいだという子供がいた(資料11 12)。相方の声の出し方や演技に感動し、友達のように演技を頑張りたいと自身の課題に気づく子供もいた(資料13)。書評漫才が受容的な雰囲気で行われることで、友達同士で助け合う姿勢が強まり(資料14)、学級内の一体感につながっていった。

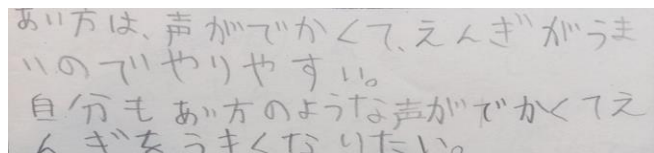
(資料11 相方に対して信頼を高めた)



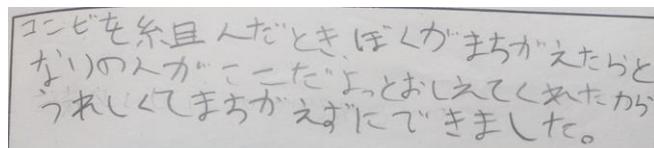
(資料12 コンビを組むことで、緊張が柔らいだ)



(資料13 相方の演技から自身の課題に気づいた)



(資料14 友達同士で助け合う姿勢)



2. 表現手段としての漫才を身につける。

演じ手(表現者)として、ボケ役とツッコミ役が「聞き手の興味を引くようにわざと間違える」「それを聞き手が納得するように本筋に戻す(正す)」。つまり、演者である子供達がお互いを補い合いながら(相補性)、一つのストーリーを完成させていった。本の紹介がねらいの書評漫才において、演じ手は本を読み込み、「わざと間違える」部分を考えていた。いかに聞き手を引きつけ笑いにつなげるかという点においては、ダウト読みよりも高度であった。しかし、ねらいは漫才の指導ではなく、教育的な視点である「聞き手を本の内容に引きつけるための漫才」であった。その本を読んだことがある子

供にとっては友達から再び本のあらすじを漫才で聞くことによってさらに本の内容をメタ化する機会、読んでいない子供にとっては本を手にする機会を得るための題材となった。

3. 書評漫才の教育効果を子供・保護者・教員のアンケート(反応)から検討する。

[子供の反応]

＜漫才の練習の中で見られた子供の変化＞

コンビで練習を積み重ねていくので、助け合いの関係ができ上がった。もともとボケとツッコミは相補的であるので、児童たちに「相方を助けよう」という意識が芽生えた。

＜もじもじせず、はきはきしゃべる(滑舌)＞

漫才においても、照れることで自然と緊張して早口になった子がいた。この漫才の指導で、堂々とゆっくり間を取るという指導が行われることで、緊張していても相手に伝わるゆっくりとした伝え方ができるようになった。

＜漫才をした子供＞

ネタになる本を選ぶ段階で、多様な本・同じ本を繰り返し読む。演じた後は、他の本も紹介したいという意欲から多読の循環がうまれた。

＜観ていた子供＞

- ・ふだん読まない本を読む。
- ・マンガの多い本から文学への転換がみられた。

＜面白い本の捉え方の変化＞

- ・自分の知っている本ではなく、紹介を受けた本を面白いポイントを意識して読むことで、その面白さに気がついた。
- ・読む本のジャンルを増やすにも効果的だった。

＜漫才という手法を用いた効果＞

- ・練習中に横からネタを見ていた子が笑っている姿にやる気をもらった。(動機づけとなった。)
- ・リアクション(笑い・沈黙)がすぐに得られるため、飽き症の子供でも意欲が継続しやすい。

[保護者の行動の変化]

書評漫才を機に、誕生日に12冊の本を買い与えた保護者もいた。子供は毎朝4時に起きて読むなど、子供の個性に応じた興味を高める工夫などに波及していった。

＜保護者の声＞

今までにないほどの大きな身振りで伝えるようになった。家で一人二役で漫才を披露するようになった。

＜教員の視点から＞

本の選定では、自分が普段選ばない本やかかつて読んで印象的だった本を選びだしていた。

笑いを入れるということは、本のハイライト部分や登場人物の設定を把握して、それをずらすという作業が必要のため一冊の本を読み込んでいた。書評漫才の台本を書くことで、お話の構成を自ら作り出すことになった。

漫才場面で相手を思いやった言葉遣いの指導を行う

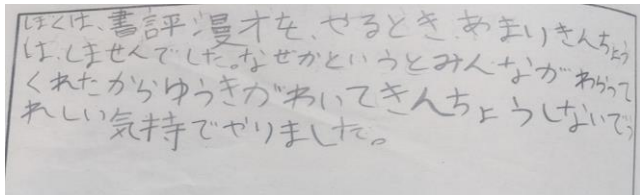
漫才を面白くするために表現が過激になったときには、「その伝え方が人を傷つけないかどうか」について指導をした。その結果、日頃言葉が乱暴な子供も指導が入りやすくなり、日常場面で厳しい言葉遣いをすることが激減した。

総合考察

紹介活動（書評漫才実践）の演者の効果としては、以下が挙げられる。ネタフリ（あらすじなど）を要約して表現すること、話の要点を理解してあえて話を本筋からずらす（ボケる）こと、天井（話のはじめのボケなどを終わりに使ったりすること）にみられるような話の構成を考えてから話することなどの力がついた。ジェスチャーを交えて話ができるようになった。声の小さい女子も見違えるほど声が大きくなり、発言もしっかりできるようになった。

演じ手の成果として、漫才がウケた体験からよりウケたいという思いが強まった。このことで、表現力をさらに高める効果、自己効力感（自信）を高める効果、および自己肯定感（自分はイケてると思う）をもつ効果につながった。漫才がウケない体験もネガティブではなく、ポジティブな効果が感じられた。これは、人前でさる体験を通じてへこたれない心を高める効果と考えられる。ウケない（笑いが無い）自分とウケている（笑いがある）人の話の仕方や表現の工夫の違いに気がつきやすいことから、「どうすれば伝わるのか」を「笑い」の大きさに気づき、ふりかえり用紙に変わるフィードバックとして機能した。演じたときに「笑われる」ことで緊張ではなく、嬉しい気持ちに変わる効果も見られた（資料15）。

（資料15 「笑われる」ことで嬉しい気持ちに変容した）



聞き手の成果として、人の発表を最初から最後まで聞くことで面白さに気がつくことができた。このことで、話の前フリとなる前提の話に耳を傾けて聞く姿勢ができ長い話でも最後まで聞く姿勢が見られた。特に一斉指導のときにこの成果が感じられた。さらに、普段の指導でも間を置いて話をするときには子供達は息を飲んで聞くなど、会話の重要な部分についての空気が読める効果も見られた。

漫才台本作成過程から発表までの相方との学び合いにより、漫才師がよく言葉にする「コンビ愛」といったコンビでの協力姿勢が前向きになり、伝わりやすさについてのやりとりが活発化した。聞く側については、話を聴かないと笑いのポイントが分からないことから、一つの指標として「笑う児童は話や本の内容が理解できている」という見方ができた。漫才を演じた後には、他の本も紹介したい意欲から多読への循環がみられた。このことから、書評漫才は読書離れの防止や読む本のジャンルを増やすことにも効果的であると言える。

書評漫才を観た子供達は、書評漫才で紹介された本の結末に興味を持ち、本を手取るようになった。結果として、紹介された本の多様な分野での読書活動につながった。

本実践は、社会での反響が大きく、朝日小学生新聞の1面・2面にわたって取り上げられた（資料17 18）。

（資料17 18 毎日小学生新聞 2014年11月28日より）



また、書評漫才の効果を実感させる出来事として、本実践の1年後の2015年9月6日にNHKのテレビ番組に読書の秋特集で東井高野小学校の「書評漫才サクリファイス」の活動が取り上げられた。特別支援児童の発表で、書評漫才を通じて人に伝え、笑いをもたらした彼らの漫才は、多くの人たちに感動を伝えた。

書評漫才は、読書内容を紹介することで笑いを取るという、一見違う性質の行為を結びつけた表現方法である。しかし、笑いを取るためには本の内容を深く理解しなくてはならず、表現方法にも工夫が必要となる。その教育効果についてこれまで実例を挙げて論じてきたが、実際に書評漫才を行ったり観たりした子供達のその後の行動を見れば、その効果は十分にあったと言えるであろう。

引用文献

国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター(2013) 子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究 報告書

高木悠哉、松岡律、熊田岐子、住本克彦、筒井愛知（2012）
「大学教育への導入に読書を用いることの有効性に関する試験的検討」『環太平洋大学紀要』5、pp. 69-77

若月・生田・吉田(2006) 教師のためのブリーフセラピー
『小学校学習指導要領解説国語編』平成 29 年 6 月 文部科学省

お笑いの達人になろう！2ーコミュニケーション力 up 漫才
ポプラ社